

聖木曜日・主の晩餐の夕べのミサ

第一朗読：出エジプト 12・1-8、11-14

第二朗読：一コリント 11・23-26

福音朗読：ヨハネ 13・1-15

2026.4.2

カトリック高円寺教会 19:30 ミサ  
アン神父（イエズス会）

共同体の皆さん、今日、聖木曜日にあたり、わたしたちはともに「主の晩餐」を記念します。

この晩餐は、イエスご自身にとっても、わたしたち一人ひとりにとっても、特別な出来事です。ルカ福音書は、次のイエスの言葉を記しています。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた」（ルカ 22・15）。また、先ほど読まれたヨハネ福音書の冒頭には、こうあります。「イエスは、この世から父のもとへ移る時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」（ヨハネ 13・1）。このように、イエスは愛に満ちた心で弟子たちと最後の晩餐を共にされました。深い切望をもってその時を迎えられたのです。パンとぶどう酒のしるしのもとに、ご自分に属する人々のために命をささげ、永遠の命の糧となられるその時を、心から待ち望んでおられました。

皆さん、確かに主の晩餐は、地上において弟子たちと過ごす最後の機会でしたね。しかし、それはまったくイエスと弟子たちとの関係、またわたしたち一人ひとりとの関係の終わりのしるしではありません。言い換えれば、この晩餐の後で、イエスと弟子たち、イエスとわたしたちは完全に別離されているということを意味するものではありません。決してそうではないのです。

むしろ、主の晩餐は、全人類のための神の自己を与え尽くす愛、すなわち「アガペーの愛」、「徹底的な愛」を示すしるしであり、同時に、新しい神への交わり方、新しい生き方の始まりなのです。繰り返します。主の晩餐は、神の最高の愛のしるしであり、同時に、新しい交わりと新しい生き方の始まりなのです。

では、それはどういうことでしょうか。今日はこの点に目を向けて、ご一緒に味わいたいと思います。

主の晩餐の中で、イエスはパンとぶどう酒の形をとって、ご自分の体と血をわたしたちの命の糧として与えてくださいました。皆さん、少し立ち止まって、このことを味わってみましょう。ご自分を、人が生きるための糧として残されること。糧となって姿を消し、その人の内で命を支えるものとなること。ここまでへりくだり、ご自分を小さくされる——これ以上に大きな愛があるでしょうか。まさに、これ以上の愛はないと言えるでしょう。このように、やっぱりわたしたちが今日記念する主の晩餐は、全人類に向けられた神の最高の愛のしるしでしょうね。

「わたしの記念としてこのように行いなさい」——これはイエスの命令です。そしてこの命令を通して、イエスはわたしたちに、神との新しい交わりの道を示してくださいました。それがミサです。ミサは主の晩餐そのものであり、命の糧である主イエス・キリストが、今もわたしたちと共にいてくださる恵みの祭儀です。ミサに与るとは、主がわたしたちのもとに来てくださり、みことばと食卓によってわたしたちを養ってくださる、その恵みを受け入れることです。

教皇フランシスコは、なぜキリスト者がミサ、特に主日のミサに与るのかについて、こう語っています。「キリストと一緒にいなければ、わたしたちは日々の疲れや心配事、未来への不安によって支配されてしまいます。主日に主と出会うことにより、わたしたちは自信と勇気をもって今を生き、希望をもって前に進む力を得ることができます。だからこそ、わたしたちキリスト者は主と出会うために、主日にミサに行くのです」(<https://www.cbcj.catholic.jp/2017/12/13/16046/>)。

この意味で、今日、主の晩餐を記念するにあたり、まずミサという恵みを、神との新しい交わりの道として感謝したいと思います。そしてこの恵みを、主と共に生きる喜びに支えられる道として、より深く理解できるよう祈りましょう。

さらに、「わたしの記念としてこのように行いなさい」という言葉は、新しい生き方への招きでもあります。今日のことばの典礼の中で、この言葉は三度繰り返されました。第二朗読（使徒パウロのコリントへの手紙）に見られるように御聖体の制定のときに二度、そして福音書が描いているように弟子たちの足を洗われた後に一度です。このことから、イエスがわたしたちに、ご自分の模範に従って生きることをどれほど

望んでおられるかが伝わってきます。イエスは、ご自分を糧として与え、弟子たちの足を洗うことによって、愛とへりくだりの模範を示されました。そして「互いに愛し合い、仕え合う」生き方を教えてくださったのです。

かつてイエスはこう言われました。「人の子は、仕えられるためではなく、仕えるために来た」(マルコ 10・45)。この言葉は、イエスのアイデンティティー、イエスの生涯の意味、イエスの生き方そのものを表しています。イエスの歩みは、常に人々のためにご自分を差し出し、惜しみなく与えるものでした。そして十字架の上で、その愛は極みに達します。命さえも与え尽くされたのです。この生き方こそ、愛そのものであり、イエスがわたしたちに示された道です。どうかわたしたちも、このイエスの模範に少しでも倣いながら、自己を手放し、人を愛し、仕える者として歩んでいくことができますように。心を合わせて、共に祈りましょう。

今日、わたしたちは共に「主の晩餐」を記念します。主よ、どうかこの記念を通して、わたしたちが主の命にあずかりながら、神の深い愛を受け、この愛の模範を生きることができますように。アーメン。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>